校長室の窓から

ユリとペットボトル・・・親バカな話

息子から LINE が来るときは「お金送ってください。」に決まっている。だから、昨日 LINE の通知があった時も、「父はお前の財布じゃない。」とか、「利率は10%でいかが？」なんて返す嫌味を考えていました。ところが、送られていたのは花の写真。（右）

なかなか前衛的な作品があったので。

ほう。

写真をよく見ると、白ユリの後ろには、らせん状にカットした青いペットボトル、その隣には、これまた、らせん状に切った空き缶。

どこで見つけたか聞いてみると、

職場の近くの駅に、いつも生け花が展示してあって、素人でも目を奪われるような作品が多くてね。
今日は特にびっくりしたので。

へえ～。

生け花に目を留めるなんて、父こそ「びっくり」だし。

それから話は弾み、

「作品と呼ぶには、『普通にいい』の領域を超えていないといけない。」とか、

「個性の強い素材の調和が大切。」とか、父を「おっ」と思わせるような発言。ところで、「普通にいい」とは、「普通」なのか「優れている」のか、一体どっちなんだ、という突込みはさておき、まさか息子と生け花談議で盛り上がるとは思いもよらず・・・つい、

父も変だけど、お前も変だな。

なんて送ったら、

そう？
確かに父は変だけど。私は違う！

って返ってきて、

「やかましい！」と送ろうと思ったら、キーを打つ速さで負けてしまい、

まあ、親子ですから。

と、先に送られてしまいました。

「人に感動してもらえて、はじめて『作品』になる。」とは、わが師の言葉。さらに、
「『どうやって合わせるの？』と人が思うような、個性が強い素材どうしが調和したとき、人は感動する。」とも。

「多様性」という言葉が、グローバリゼーションや AI と並んで、現代を解くキーワードの一つとなっています。そうしてみると、どうやら人間社会も、個性や特性が違う者どうしで調和していくことが必要な（「大切な」ではなくて）時代になったようです。そして、調和の先に感動が待っているのなら、やってみる価値があると思います。

多くの人が、その前を素通りする駅構内の一瓶。

まことに親バカですが、この一瓶に目を止め、「調和」という言葉で語ることができた息子を、ほんのちょっと誇らしく思いました。

それにしても、奴はどこで「父のトリセツ」を手に入れたのか・・・。

作　　者 ： 池坊華道教授 原 秀峰
タイトル ：「残暑にカンパイ」
素　　材 ： ユリ クルクマ アレカヤシ
　　ペットボトル 空き缶